

一年一組 国語科学習指導案

日時：令和元年十月二十六日（土） 公開Ⅱ

学級：一年一組（男子一四名 女子一四名）

場所：彩の間（西舎四階）

授業者：川久保 智子

1 単元名「論点を捉えて」

話題や方向を捉えて話し合おう（グループ・ディスカッションをする）

光村図書一年

2 指導の立場

(1) 単元の「つきたい力」を確実に身に付ける単元指導計画の作成

① 九年間の系統性を踏まえた単元の「つきたい力」の明確化

本単元は、「話すこと・聞くこと」領域「話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）」オ「話題や展開を捉えながら話し合い、互いの発言を結び付けて考えをまとめること」を指導の中心に据える。

これまで「読むこと」領域にのみ位置付けられていた「考えの形成」は思考力、判断力、表現力等におけるすべての領域で位置付けられた。さらに「話すこと・聞くこと」領域では「イ 構成の検討、考えの形成（話すこと）」「エ 構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）」オ 話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）」の三つの指導事項に考えの形成が位置付けられている。学習指導要領の目標にある「人との関わりの中で伝え合う力を高める」ためにも、「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」のすべての学習の中で子供たち自身がより質の高い言語活動を拓いていくことが「話すこと・聞くこと」の学習の目指す姿であると捉えている。

また、教育の今日的課題として、子供たちに思考力、判断力、表現力等を身に付けさせることが挙げられている。本校国語科では「話すこと・聞くこと」の「考えの形成」にかかわる指導は、その意味でも重要な役割を担うと考える。なぜなら、子供たちは言語によって思考し、他者にその考えを伝えるのも言語によって表現するからである。また、その判断を他者に伝えるのもやはり言語である。つまり、伝え合う力は思考力、判断力、表現力等を発揮する際の多くの場面で必要となり、それは教科横断的に活用できる力となるからである。さらに、すべての領域に位置付けられたことから「考えの形成」はこれまで以上に重要視されていることが分かる。これに対して本校国語科は、平成二十七年からの三年間に、「生活をきり拓く力」を身に付けるための重要な要素として、「C 読むこと 自分の考えの形成」に力を入れて研究実践をしてきた実績をもとに、昨年度よりすべての領域での「考えの形成」の研究実践に力を入れている。

グループ・ディスカッションは、少人数で行う話し合いの形態である。司会や書記という役割を決め、限られた時間の中で目的に沿って話し合う。話し合いの目的としては「意見や情報の交換」「合意形成や意思の決定」が挙げられる。子供たちは中学校1学年までに司会や提案者などの役割を立てて話し合うことや、目的に向かって、立場を明確にして、互いの考えの共通点や相違点を考えながら計画的に話し合う活動を学んできている。しかし、日常の話し合いの様子を見ると、互いの意見を出し合うことはできるが、それぞれの考えをまとめていくことに対しては弱さが見られる。前期の生活を終え中学校生活にも十分に慣れた中学一年生の子供たちは、今後、自分たちで生活を拓いていくために多くの意見を交流したり、合意形成を図ったりする場面が増えてくるだろう。そこで、日常で起こる様々な問題に対処し解決していくためには短い時間の中で効率よく話し合えるグループ・ディスカッションを今の段階で学ぶことは最適だと考えている。さらに、生きて働く力として生活の中で活用していくには、その形態を知るだけでなく、どのように伝えれば相手を納得させられるのか、どういった質問をすればより詳しく相手の意見が理解できるのか、どのように話し合えば目的に忠じたゴールに辿り着けるのかを子供たち自身が掴み取る必要があると考えた。このことから「話すこと・聞くこと」領域における「考えの形成」に関わる力を段階的に

【単元の「つきたい力」】

◎話題や展開を捉えながら話し合い、互いの発言を結び付けて考えをまとめる力。（A「話すこと・聞くこと」オ話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）」）

○必要に応じて記録したり、質問したりしながら話の内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめる力。（A「話すこと・聞くこと」エ 構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）」）
○自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考える力。（A「話すこと・聞くこと」構成の検討、考えの形成（話すこと）」）

② 深い学びにつながる「ひびきあい」の組織

本時は、自分の考えを形成していく過程において子供たちの見方・考え方を働かせた考えをひびきあわせることよってこそ、前述のねらいに到達することができると考え、「ひびきあい」の組織を指導の手立てとした。

子供たちの実態を明らかにするために本単元に入る前に実施した意識調査を基にどのようなことに課題を感じており、どのような力を付けたいと思っているのかを明らかにした。さらに、普段の話し合いの様子や前時のグループ・ディスカッションから、相手の意見の「方法」に着目するのか、それとも「利点や問題点」に着目するのかという視点で子供を捉えた。

まず、本時の導入部分で質問に焦点を当てて考えることを意識づけし、実際に映像を見ながら全員で質問を考える活動を行った。その中で、「方法」と「利点や問題点」という二つの考えを基に自分の考えを形成しようとすると考えた。

【方法に着目した考え】

種を地域の人に配布するという意見があったが、どんな場面で、どのような人に配るのかをはっきりさせた方がよい。

【利点や問題点に着目した考え】

配る人が限定されている。しおりを作るといい案はともいいと思う。知識発展部員と連携して読書量を増やすことにつなげられないか。

意見交流をする中で、自分の考えと、異なる仲間の考えにふれた子供たちは、自分とは違った視点から仲間の意見を聞くことができるようになると考えている。さらに、二つの考えに共通した「それぞれの意見を詳しく聞き出し、より具体的な意見にして報告できるようにすることが大切」ということを確認することで、話題が変わっても同じ視点で質問ができるようになると考えている。

③ 資質・能力が確実に身に付く指導と評価

資質・能力を確実に身に付けるため、まず、子供一人一人の実態を把握した。単元に入る前の意識調査や第二時に考えた話題に対する意見、そして、意見を支える根拠をどういった視点で考えているかというものを分析した。そして、それを机列表にしてまとめ、誰がどのようなどころでつまづいているのか、あるいはどのような考え方をしているのかを単位時間の中でつかむようにする。つまづいている子供には考えるヒントカードを指し示して思考を助けられるようにした。

最後に、単位時間の終末で、本時の課題に対するまとめを書きまとめる際に、全員が確実にねらいを達成できるように、定着が弱い子供のところを意図的に机間指導するなど、定着の見届けを行うようにしている。

(3) 教科の本質に根ざした学習集団の育成

① 生活集団を基盤にし、教科の本質に根ざした学習集団

本教材では、「解決策を探りたい」という話し合いの目的のもと、学級の課題について話し合う。普段から行っている班での話し合い活動の質をさらに上げていくために単位時間ごとに「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」の指導項目を意識しながら話し合う。その際には、これまでの自分を振り返りながら、今後どうしていくべきかを具体的にイメージしていくことを大切にしたい。

こうした学習の流れに立つたうえで、本時では次のような姿を大切にしたい。

○交流の中で理解した「方法」と「利点や問題点」という二つ考えを基に質問をしながら自分の考えをまとめようとする姿。

② 九年間の学びを見直し、教科の本質を踏まえた学び方の指導

教科の本質を追究する学習集団の育成を、教科係との連携によって進めている。本時は、次のような「目標」と「振り返り」を述べる教科係の姿を生み出し、学習を主体的に高めようとする集団育成の手立てとしたい。

〈目標〉

今日は、より話し合いを深めるには仲間の意見に対してどのような質問をすればよいかをみんなで考え、実践していきますしよう。

〈振り返り〉

○〇さんは、他の意見との共通点や相違点を挙げながら、仲間の考えをより詳しく聞き出そうとする質問ができていたのでよかったです。

このような営みを継続することで、子供たちの国語の本質を追究しようとする意欲を育てるとともに、学習の達成感を高め、教科の本質に根ざした学習集団として育つことをねらっている。